

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
第3回 次 第

令和2年10月13日(火)
15時～17時(予定)
三鷹産業プラザ705会議室

- 1 スクール・コミュニティの創造～地域総ぐるみで行う教育、学校を核としたコミュニティづくりとは～
 - (1)「探究学舎の取り組みとこれからの学びのコミュニティ」
宝槻 泰伸 研究員(探究学舎 代表)
 - (2)「ネットワーク・コモンズとスクール・コミュニティ」
木幡 敬史 研究員(嘉悦大学ビジネス創造学部学部長 教授)
- 2 意見交換
- 3 事務連絡

【配布資料】

- 1 「三鷹のこれからの教育を考える研究会」研究員一覧
- 2 宝槻研究員発表資料
- 3 木幡研究員発表資料
- 4 第2回研究会後に寄せられた各研究員からのご意見
- 5 今後の予定

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
(第3回会議録要旨)

日 時 令和 2 年 10 月 13 日 (火) 午後 3 時～5 時
会 場 三鷹産業プラザ 705 会議室
出席者 後藤 彰(座長)、阿原 あけみ、緒方 一郎、木幡 敬史、相馬 誠一、常盤 豊、
宝槻 泰伸、宮城 洋之、宮崎 望
オンライン出席-佐藤 量子、柴田 彩千子、林 寛平
事務局 三鷹市教育委員会事務局、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

1 事務局から報告

事務局から、東京学芸大学准教授柴田彩千子氏に新たに研究員にご就任頂いた旨を報告。

○柴田研究員挨拶

私は地域の教育力を活かしていけるかということテーマに研究活動をしている。よろしく
願います。

○総合教育政策担当部長：柴田先生には前回のこの研究会にも研究員としてご参加いただ
いた。また、前回ご欠席だった探究学舎の宝槻泰伸様にも今回からご出席いただ
いて。後ほどご発表でお話を伺う。(配布資料5点の確認。)

2 スクール・コミュニティの創造～地域総ぐるみで行う教育、学校を核としたコミュニティ
づくりとは～

(1) 「探究学舎の取り組みとこれからの学びのコミュニティ」

・・・・・・・・・・・・・・・・探究学舎 代表 宝槻 泰伸

今日のタイトルにあるのが、地域、コミュニティ・スクールの今後についてであるかと思
うが、私自身は民間の学習塾とか習い事産業とか、いわゆるプライベートセクターの一員な
のでコミュニティ・スクールで何ができるかという具体的な答えは持っていない。しかし、三
鷹のプライベートな塾、教育もコミュニティの一員だと思っていて、学校の先生や地域のボラ
ンティアの方と自分たちも三鷹の一員として教育に関わっているプレイヤーであるという意識
を持ってこの場に至っている。三鷹の一員としてこんな活動をして、こんなことを考えてい
る、こんな風に日本の保護者あるいは子どもたちがリアクションをしてくれているという事例
として皆さんに私たちのことを伝えさせていただき、その上で探究学舎がやっていることが三

鷹の今後の教育の中の一要素として役立つことがあるのではと、皆様にお考えいただけたら、今日の私の役割は成立しているかと思う。手元にある資料で探究学舎について簡単に説明する。ページをめくると「驚きと感動の種をまく」「学びへの興味があふれ出す魔法の授業」というキャッチコピーが目に入ってくるかと思う。従来、受験勉強とか教科学習を教えるとか生徒指導の成績を上げるというのが学習塾のミッションであり、その効果に対して保護者はお金を払ったり、子ども達の時間をさいて行くというのが一般的な理解だと思う。これまでの学習塾の授業では英語であるとか、プログラミング、算数であるとか、あるいは受験と言う明確なゴールがあり、そういう習い事でないと成立しないと学習塾の経営者は口々に言っている。私たちのように受験も教科指導も学校と関係ないし、受験とも関係ないような習い事が成立することはありえないという文脈の中から10年前にスタートしている。現在教室会員が500名ぐらいで、オンライン会員が2000名ぐらいいて、探究学習というプログラミングで受験とか教科指導とか関係なくやれているのは日本ではこの一社だけではないか。他にも私と同世代の30代40代のベンチャー経営者でプログラミング、ロボット技術そういう分野で受験と紐付かない形で何億円かの規模でやっている所は2~3あることは認識している。つまり新しい市場と我々は捉えている。資料の4ページに探究スペシャルという記述がある。そこにポスターが何枚か貼ってあり、ここには戦国英雄編とか戦国合戦編とかDNA編、音楽編、地球編、生命進化編、人類進化編、算数図形編というのもあり、イメージで言うとNHKスペシャルのサイエンスとか社会科学とかそういうものに関するドキュメンタリー番組という、教養番組に類似性が強いプログラムである。何か計算力とか読解力とかコミュニケーション能力とかプログラミング能力とか具体的な能力を育てるというよりも子ども達にいろんな分野のいろんな物語いろんなストーリーというものを学んでもらい、もっと知りたいもっとこういうことをやってみようという興味を育てることを目的としたプログラムを具体的に30種類ぐらいのコンテンツがある。私たち自身の調査によれば、今後もこのような探究型の学び、子ども達の興味を育てるような学びに関心がある是非やらせてみたいと考えている保護者の潜在的ニーズは結構強くあり、私達の会社の成長だけでなく、今後この分野に日本全国の様々な会社が参入してくるという風に予想していて、例えばベネッセさんが興味を示していて、11月に社長とプレゼンする機会があり、ベネッセさんもこういう分野に興味関心を示して今後の可能性を模索している。そんな動きが民間の中であることを一度ご報告したい。

こういった学力とか受験とかとは関係しないふわっとしたプログラムの塾が保護者に選ばれはじめている理由はなんだろうという市場の動向について、私から簡単なプレゼンテーションをお話しさせていただく。これは保護者の方に200回ぐらい講演会で話してきた内容で、まず、お父さんお母さんにこういう質問をする。子どもの将来に期待することは何か？昔だったらいい大学に入って欲しいとか将来安定するような仕事に就いてほしいとか

おそらくそういう話をするお父さん・お母さんが一般的だったと思うが、最近のお父さん・お母さんは変化がありまして、特徴的なのは、好きなことを見つけてほしい、自分で考えて欲しい。親が自分の経験からくる答えを子どもにぶつけないというよりは子ども自身で自分の将来を切り開いてほしい、そのことに対してあれしてほしいこれしてほしいという具体的な期待というのはあまり持っていないという保護者が増えているという印象を持っている。集約すると今の保護者の多くは社会の中で自立してほしいという期待と好きなことでチャレンジしてほしいという期待と概ね2種類の期待を持ってると私自身は考えている。これを構造的に分析してみると社会の中で自立してほしいというのは環境や時代が変わっても普遍的に続く親の期待なのではないか。つまり、公教育であっても民間教育であってもこの社会で自立することに向けて教育を提供していく提案していく責務があるというのはひとつの説明の仕方だと思う。つまり江戸時代でも昭和でも令和でも100年後でも親であれば子供が今の目の前の社会でちゃんと自立して経済的にも成長的にも大人になっていくというプロセスに期待を込めて教育というものを整えて行くという考え方。一方で好きなことにチャレンジして欲しいというのは非常に現代的な親の願いだなと捉えることができると思う。具体的に封建制な社会であれば身分制があるので自由に職業を選んで行くと言う根拠そのものが存在しない。だから好きなことをやりなさいと親は言わない。明治大正昭和となって職業選択の自由が憲法に謳われるようになったが実質的に家業というものにつく子ども達が過半数を超えていたという統計データがあつてつまり自由に人生を選んでいる。昭和になると一般的な企業に就職する割合が家業に就く割合よりも過半数を超えてくる。とはいえ好きなことを仕事にするという文脈というよりは、ちゃんと安定するかとか、将来にわたって稼ぎ続けられるとかそういうことを昭和時代は重視して、例えばYouTuberになるとかあるいはスポーツの世界でチャレンジするとかあるいはアートの世界でチャレンジするとかはリスクが高いことで、もうちょっと安定して稼げる大企業に就職するために昭和の保護者の関心事として大きかったのではないかとというのが非常に私が同世代の保護者と語り合っていて感じる大きな変化だと思う。

社会的な中の自立、普遍的な願いというのは教育として時代が変わってもあまり変わらない。要するに能力を身につけさせることがひとつの柱となってくる。能力開発と言うかと思うが、記憶力、集中力、忍耐力とか、今までの学校教育、受験ではみんな取り組んできたと思う。ところが時代が変わってきて、問われるべき社会の中で必要な能力がどんどん変化している。まあ集中力とか読み書きそろばんとか基礎的な能力は必要として、残りの部分はプレゼンテーション力とかコミュニケーション力とか主体性とか、そういうものも指導要領の中に入ってきていると思うし、だから能力開発の中身も時代に合わせて変化していく。

江戸時代の寺子屋でやっていることと、近代社会の学校でやってることとまた昭和の高度経済成長を抜けた成熟社会の日本で行われるべき能力開発はどんどん変わってきている。能力開発というテーマがひとつあつて主体的に子どもたちが能力を伸ばしていくために公教育も民間教育も分け隔てなくアクティブラーニングとか主体的な学びというものを具体的なカリキュラムとして再編成して行こうというのが今日の一個の大きな潮流であるかと

思う。私自身はこの問題解決にプライベートセクターとして関わっていない。それよりも2個目の子ども達がどうやって好きなことを仕事にできるか、好きなことで自立できるか、例えばさかなクンとか、あるいは時計職人で自分の好きな時計を一年間に一個生産して、一個2000万もするのですが、好きなことでメシを食っていく。売れるからそれをやるのではなくて自分がそこに思いがあるからやるという起業家もたくさんいる。

例えばユーグレナはミドリムシがこの地球の栄養環境を変えて行くということを信じて起業した。これが好きで情熱があるからやり続けた結果、経済的にもある一定の成功を果たした一例である。つまりは自分が好きだとかやりたいとかそこに情熱があるというのが原動力となって仕事をしている人たちの代表例である。こういうイメージをお父さんお母さんは最近思っている。安定するかどうかとか、その仕事に就いた結果高収入が得られたとかではなく、そのプロセスの中にその子がワクワクしているか、生涯をかけて夢中になっているか。

ではそういうゴールに向かっていくというのは計算力を伸ばす、コミュニケーション能力を伸ばすというような能力をいっぱい育ててあげればいいというのでは目的に対してちょっと違う。そこで私たちは好きなことを見つけて育てるプロセスを、興味開発と呼び、これを具体的に習い事として提案する教室である。ここまでプレゼンすると保護者の方は結構納得する。

確かに英語、プログラミング、算数、読解力など、能力開発の類は公教育の取り組みに期待したいし、足りない部分は例えば公文とか学研とか、これが日本の市場動向、消費行動かと思う。もう一個並立してある興味開発は、従来の教育産業では満たされないニーズであり、また学校教育でもどこまで踏み込んでその観点からカリキュラムを作られているのか怪しい。なので、探究学舎はそこを提供しているということを保護者の方に伝えている。

では公教育として今まで能力開発としてやってきたし、市民の一員として様々な経験を重ねていこうということも行ってきたと思うが、好きなことや夢中になることを見つけるという興味開発という領域に、公教育が今後どこまでチャレンジしていくことができるのか、またチャレンジしていく必要があるのか、この辺りが、私がこの研究会に提供できるひとつの問題提起である。

○後藤座長：宝槻研究員のただいまのプレゼンについてご質問、ご意見等あるか。せっかくの機会なのでどうぞ。

○常盤研究員：質問というより感じたことだけ申し上げたいのだが、私も実は文科省に長くいて、学習指導要領にも、10何年前に関わっていた。

今学力については、3つの要素、知識・技能と能力と主体性が言われている。その中で、従来の学校教育は知識・技能を中心にしていたのを、文科省的に言うと、能力開発と主体性の方にまで持っていきたいと思っているわけである。しかし実際には今の話にあったように主体性のところにまではあまり踏み込めていないと感じている。15年前の学力低下批判の時代に能力開発教育を進めるのか、詰込み教育に戻るのかという議論があった時に、そうじゃないだろう、第三の道に進むべきではないかという議論になった時に、ある若い職員が、

「これからはやる気教育である」と言った。そのことがすごく印象に残っていて、今日の話聞いていて、まさにそのやる気教育を実現するための具体的な提案をしていただいているんだなと感じた。とても素晴らしいと思ったし、その一方でまさに問題提起にあったように学校教育がどういう風に取り組んでいくのかというのはとても難しい問題提起だなと受けとめた。

○宝槻研究員：この図はたぶん皆さんもよくご存じだと思うが、この図で分類すれば、確かに私たちに取り組んでいることは、赤ではなくてどちらかというところと青であるし、ちょっと黄色の部分もあるのかなと思う。一方で先生が語られたように日本の教育産業では、赤は得意だけれども、青が一番苦手というのは歴史的にそうなのかなと。どんな取り組み方が、結果的に赤、黄、青の三つを補完するようになるのかはまだ明確な答えはないと思うが、おっしゃられるように私たちは青の部分を中心に、こういうことをやりたい、将来こういうことを実現したいという主体性のある子のほうが、自分の知識や思考力をより解像度高く活用できると思っていて、逆に日本は主体性を個別に大事に育てるよりも、とりあえず全員の能力や全員の技能を育てて全体で産業をのし上がっていくというようなこと。その結果、大学では好きなことややりたいことが見つからなくて困っている、とりあえず就職するのだけど、3年ぐらいでやっぱりこれは違うなと思って離職する。3年間で離職する割合が今3割ぐらいと5年前に調べた時に出ていたのですが、職業と子どもたちとのマッチングも、主体性とかビジョンというものを教育的にサポートしてこれなかった反動として起こっていると思う。なので、私自身こういうような問題意識を持っている。

○後藤座長：他にいかがでしょうか。

○宮城研究員：今、主体性ということでお話があったが、学習指導要領の改訂に伴い、学校では新しい学習評価への対応が課題となっている。これからの授業を変えていく大きな切り口になると考えているのは、「主体的に学習に取り組む態度」という評価の観点である。この「主体的に学習に取り組む態度」には二つの側面があるとされていて、一つは粘り強く取り組む態度、もう一つが自らの学習を自分自身で調整していく、簡単に言えば自分自身で学習のPDCAをまわしていく態度である。技能・知識や、思考力・判断力・表現力を身に付ける授業というだけではなくて、主体性が発揮できるような、子どもたちが粘り強く取り組んだり、自分の学びをつくっていくことができるような授業を教師がしかけていこうというようにシフトしていく必要があるとも考えている。ただ、粘り強さや自分の学習を調整しようという意欲はどこから出てくるのかというと、堂々巡りになるが、どうやって興味を喚起するのかというのがとても大きい。一例をあげると、中学校2年生で例年3日間職場体験を行っているが、今年はコロナ禍で実施することができない。そこで、リモートで電話やZoomを使った取材をやることを計画して、今中学校2年生が、いろんな事業者で電話でアポをとりながら取材の依頼をしている。自分自身の興味が持てるような職業がイメージできる子どもは本当に意欲的にやっている。ただ残念ながら、何に自分が興味をもてるのかわからない、そういう子たちはなかなか意欲的になれない状況もある。興味をもてるかどうか、興味をもてるものを自分でわかるかどうかということで、二極分化しつつあるような危機

感をもっている。

そういう意味でいうと、探求学舎の興味開発では、どういう切り口で興味を掘り起こす、開発することをされているのか、非常に興味がある。

○宝槻研究員：それでは少し具体的に話してみる。いっぱいコンテンツというか興味開発のやり方があるが、一言でいうと驚きと感動である。驚いたり感動したりという学びの原体験を子どもたちが感じれば、勝ったというか、あとはほっといてもいいと。

つまり、どうやって子どもたちは好きなことを見つけるか、どうやって興味を育てるかという問いに対して、私たちの仮説は、「わあ！すごい！」という言葉が子どもの口から引き出す瞬間に一番興味が湧く。もっと知りたいやってみたいと思う。でもたぶん大人もそうだと思う。

例えばワインを匂で味わってみようとか、最初にソムリエについてもらって味わって、「わあ！すごい！」ってなったら、家でもフランスワインとか飲んでみようかなとなるし、あるいは演劇だとか歌舞伎だとか車だとか、いろいろ大人の趣味があるが、結構原点ってこういうものではないかと思っている。

驚きと感動の種をまくという、これキャッチコピーであるが、そういうことが大人として子どもたちにできれば、彼らは勝手に自分がこれを知りたい、調べたいから、こういう粘り強い探求学習、調べる学習をおこなって発表する、という成果にたどりつけないと思う。

驚きと感動を感じない子は、業界用語でやらされ探求という、「いいから、三鷹の水道について調べてみようよ」という別に知りたくもないけど先生に言われたから課題にして形だけやる、それがさっき言った二極分化の下のほうの残念な現象。そういうのを防ぐためには、まず一番最初に驚きと感動を与える必要があるのではないかと。

そういう意味でいうと sense of wonder ということを言ったレイチェル・カーソンが何十年も前に同じようなことを言っている。子どもたちの世界は、本来新鮮で美しくて驚き感動にあふれている。ところが、面白くない授業とか大人の都合で事実をうのみにさせてそういうものだと驚きや感動に蓋をするような学習体験が世の中に広まっていないか、と言われると、そういうのがあるなど大人は思う。だから、知りたがる道をどう切り開くかということが、すべての教育機関において大いなる課題だと思う。

それで、私たちはどうやるかという、たとえば算数で数を学ぶ際に、教科書的に鵜呑みにさせられている、驚いたり感動したりしたことがあるかというとな、でも数にも驚いたり感動したりできるんだよと、昔は数がなかったから、数を数えるのに石とか骨とか使っていた、5個とか10個とか数えるのは簡単だけど、百とか千とか万とか数えたり計算したりするのはとても難しいよね、そこで人類は必要にせまられて数を生み出すことになる。

それで、最初に数を生み出したのはこの文明人だ、ちょっと見てみよう、シュメール人というのはメソポタミア文明というアラビアの人たちが作った数字ってこんな感じなんだよ、とみせると、「え？何これ？」というような反応になる。これはクサビ形の「1」をデザインしたもので、どんどん並べて数えていた。

次にエジプトではどうやったかという、こういう感じで「1」という棒を並べてやって

いたんだけど、エジプト人はヒエログリフというお絵描きが大好きだから、こういうふうにお絵描きして数字作ったんだよ、という、「まじか？ありえない！」となる。ではこの数字を使って2万いくつというのを作ったらどうなるの？想像できない？じゃあ見てみよう！2万…は、こちら。「えー？こんな数字ありえないよ！」というふうにやっていって、具体的にマヤ文明の数字やいろいろな数字を出していき、最終的にインド人が数字を作ったのは一筆書きだった。マヤ文明は顔文字で、インド人は人差し指でペンとかないので書いていたという、じゃあ、この中で私たちに受け継がれている数字ってどれだと思う？そうすると、みんなさすがにマヤじゃないよね、インドじゃないか？そうなんだよ、インドで1500年前に開発された数字がだんだんと時間を経て少しずつ変化して今の数字になった。こうやってやると物語風だと思う。じゃあ、何でインドの数字が世界中に広まって、マヤやメソポタミアや中国の数字は広まらなかったかというのが、子どもたちが知りたい興味の的になる。

ではそれを見ていこう、といろいろ物語を伝えていくと、どうやら計算に優れている唯一の数字だということが明らかになり、そこから筆算というアルゴリズムを世界中の人たちが学ぶようになり、君たちは今筆算という掛け算とか割り算とかいうやり方を学んでいるんだ、君たちはインド人たちの発明の恩恵を今受け取っているんだ、だからそろばんは習わなくていいんだというストーリーに持っていく。こうすれば数字に興味を持たせる具体的なヒント、エッセンスになると思うのだが、一言でいうと、子どもがわくわくするように物語化して伝えていくというのが、今日簡単にお伝えできる我々のエッセンス、技術だという答えにする。

他にもいろいろと私たちが発見して研究した結果があるが、もし今後機会があれば、喜んでお知らせしたいと思う。

(2)「ネットワーク・コモンズとスクール・コミュニティ」

.....嘉悦大学ビジネス創造学部学部長 教授 木幡 敬史

三鷹のコミュニティ・スクールでこれまで勉強させていただいたこと、福島県の被災地や宮城県、北海道で地域と学校をよく絵売ること実践などこの10年間携わってきた。三鷹の学校、平成18年から始まり、これからのコミュニティ・スクールがどこへ行くか、次の三鷹のビジョンがどこに視線を向けているか繋がっていけばいいかを話せればと思う。2016年10月、三鷹市の全てのCS委員さんに「コミュニティ・スクールとどう関わっていくか」というアンケートを取った。その結果、肯定的回答のトップ3は、99%のCS委員みなさんが「学園学校が良くなることに貢献したい」と思っている。99.7%の委員さんが「自分が所属しているCS委員会は学園・学校に重要な役割を果たしている」と思っている。そして、「学校学園のためにもっと語り合いたい」と思っている。子どもたちのためにもっと大人たちが、地域が、何ができるのかとほとんどの方が思っている。三鷹のコミュニティ・スクールは、ボランティアな活動を支えていた地域の皆さんの思いが、

この教育の方向性を支える地域の原動力である。他の地域と比べても志が高い方が多い。一方、できていないことは、他の学園でやっている事を知り、もっと情報交換をしたい。CS委員のことを他の人たちにどうわかってもらって、拡げられているか。思いをどんどん深めて広げていきたい。というところにこれから三鷹としてはまだまだチャンスがある。

もう20年前、我々がどのような発想で学校のコミュニティ・スクール構想をしていたかというと、学校へのボランティアな貢献と、地域の方々が、自分たちの力、思い、考え方を寄せ集めて子どもたちの教育のために形にしていく、自発的に、子どもたちのために何ができるかという志を持った人が集まる拠点という事であった。

もう1つは、学校を核としてコミュニティをどう作っていくか、地域の中で集まれる場所、広いところが学校にあって、地域の学校が良いと思えるようにしたい。

もう1つは、データに基づいて学校経営をどう考えていくかであった。

多様な人達に関わる事、組織化していくか、人と人の繋がり付け方、ネットワークの問題、評価のデータ、組織とネットワーク何が起きているかがわかるように、構造をどうつくっていくか、組み込んでいくか、どう子どもたちの環境を改善していくかという話で、このようなことを考えて20年間が経った。

この20年間で問題が変わって行った。学校は閉鎖的だと。中1ギャップ。小中一貫教育となった大きなキーワード。小学校ではよかったのに、中学になって死んだ魚の目のようになってしまう。学校は何をやっているかと改善しないとされたらおしまい、学校評価のきっかけとなった。こうやって、この20年間で制度的な改革をしていった。

ただ、今回コロナになって、大きく対処しなければならない社会構造の問題が変わったと思っている。感染症自然災害から逃れられない。ビックフェローにはならない。大学もリスクゼロはありえない。ただ大学でも限りなくどう対応するか課題であり、どう徹底するか学校教育は考えていくことが必然である。大学も安易に登校すると言っても、クラスターが発生した現場で、学園を守ろうとしたら、そう簡単には対面に戻せない、そこをどうするかなどが課題である。

もうひとつは人口減少。これから保護者の中でも価値観が変わっていく。いろいろな多様な価値観、社会的にはLGBTなど、保護者の育て方の価値観も違う。子どもの価値観も異なる。このような中でどう対応していくか考えなければならない、これからの三鷹で突きつけられていく問題になってくるのではないか。

今の子ども達は、Z世代と言われていて、生まれたときから高速インターネットがあり、YouTubeのようなものを駆使し、多様なゲームがあり、マネタイズの方法が違う。売る、買う、いくらというマネタイズが変わりつつある。フリーな世界の中で、大人が考えている年収がいくらだというようなことから変わってきているので考えないといけない。さらにα世代は、キャッシュレス、音声入力もあり、どういう子ども達をこれから育てていけばよいか。

常に、新しい情報がネットから入る、そして自分の意見を出すのが当たり前。自分はどうか、ツイッターなどで意見を出すことがある。人と同じ事を嫌い人と違うことがクールだと言われている。

共通しているのは、この世の中、完璧ではない。理不尽。SDGs、環境問題など子どもたちは問題意識を持って生活することに価値を感じる世代。例えば興味意識があったがどのように問題意識をつくるかということに課題がある。ただ問題意識があるわけではない、そこをどう考えていくか。

もう一点コミュニティ・スクールで大事な要素だと思うのは自律分散協調システムだ。インターネットの世代である。例えばここで円を書いてください、輪になってくださいという問題を人間に頼むのとロボットに頼むとする。もちろん半径と中心が決まれば円はかける。どうやって絵を描くにいたるかを考えると、自律した個だと分担して互いに協調するかを考えて、自分の位置は周りと総体的に決まる。誰かに命令されるのではなく、自分の居場所は相手と協調しながら自分はこのポジション取るか、全体として絵を書いていく目的が達成されていく。個の確立であるとか主体的な行動ができる事と、分散性、多数の個がいて空間的ネット的分散になる。何も三鷹と考えたら学園に1個が単独な学園ではなく、分散性から協調を考えると、三鷹市内の子どもたちは一つの学園の子ども達とみなす。学びの場を考えると、世界中の子どもたちが日本のことを学びたいと言っている。東京の三鷹の子どもたちと交流したい世界の子どもたちはたくさんいる。交流したい先生もたくさんいる。英語や日本語で文化を紹介する。そういった学びの広がりを見ると、今ズームでもできている。ただこういった空間的な分散を考えた場合にあくまでも学校の中で閉じているのではなく、範囲設定において空間分散していく。ともう一つは共有すること。全体で何を指すかを共有することが大事になる。

次に、スクール・コミュニティのコモンズの紹介。コモンズは共有地。ルール、ロー、ツールを持って、コミュニティの共有資源を管理することである。子ども達を成長させること、子ども達が共有資源を作るか、それを資源としてどう感知していくか。誰がどうする、役割や仕方を考えていく。共有と学ぶ場であり成長の場であり、多様な価値を共有する協働の拠点。三鷹の中で多くの人が協働の拠点となるイメージ。そこで経験が蓄積されていく。経験が振り返ることにより協調行動を取った方がお互いメリットがあるとわかる。この中で関わり続けていくことで自分の役割、保護者やボランティアの方が気づき始める、自分の関わり方がわかる、そこで自分の意見、役割を發揮できる。そこでたまってくるのがソーシャルキャピタルである。ソーシャルキャピタルが溜まっている地域は地域の方が活発に動かれていて、失敗談や成功談を含め、それが次の知恵となって来る。そういったものが地域で溜まっていくのがソーシャルキャピタルである。信頼・規範・ネットワークによって、経験的に関係性の上に蓄積される。これが、コミュニティ・スクールの本質、ソーシャルキャピタルがどうたまっていくのか、どうためればよいかも重要となる。

施設整備も重要であると思う。この10年でとんでもないことを経験してきた。震災や台

風もそうだが「これまで経験したことがない」という言葉をこの10年間何度も聞いてきたが、想像を超えている。学校の子ども、地域の安全安心を確保する場ということがある。そして感染症がキーワードになる。子どもたちは震災の時でも学びは続けようと、先生達も必死に頑張ってきた。これから三鷹で感染症自然災害によるロックダウン等が起きた場合子どもたちの学びを止めないためにはどうしたらいいのか。常に21世紀は感染症の世紀だということを忘れずに、どうすれば施設整備で、学びを止めないで続けられるかを考えることも三鷹ではこれから重要なことである。だからこそ地域の方達が集まって心が豊かになれることを考えていかななくてはいけない。

感染症、自然災害のソーシャルデザインを、対処対応した学校のデザインを考えていく。グループ学習等の仕方など新しい方法、アイデアが必ずある。デザインでどう対応できるのかと。オンライン学習、対面など色々な形で学ぶことができる。先生が全て授業をしなければいけないということではないことがコロナでわかったかと。いろんな展開ができ、色々なコンテンツや人のコーディネートがこれから求められていくことになるし、環境設備、多様な価値・生き方・働き方から学ぶこと、仕事、価値観といったところをどうやって考えていくか。日本だけでは生きていけない時代は明らかで、子どもたちのビジネスの相手は日本ではない、価値を共有するのは日本でない人たちとも考える。そんなことを考えながらいろんなことが取り入れられる組織であり、制度であり、設備であり、ネットワークを考える。

○後藤座長：今のお話への意見やご質問があればどうぞ。では私から。

学園の枠を超える教育課程ということであるが、三鷹市全体で、例えば、学習指導要領にない事を考えるということ等どのようなことがあるか。

○木幡研究員：それぞれゲスト講師や地域で話をしてくれる人が来たり、興味関心に従って、七つの学園で、例えば飛行場の人が来るとか天文台の人が来るとか、そしたらそれを7学園みんなで見ると。それぞれの先生が作っていくのは大変なので繋がれるところは繋がっていき、三鷹の子どもとしてオンラインでつながって学ぶ様なイメージである。それはコンテンツによっていろいろ学園ではとても面白いことをやっている。いろんな人が関わるコンテンツづくりができるので、それにみんな乗っかって共有していく。色々な学びの中でやっていける学園の枠を超えるというのは一つの学園の特色カリキュラムを7学園で共有する。例えば世界の人と繋がることも考えられる。

○後藤座長：例えば放課後にいろんな講座がそれぞれの学園でやっていて、それを一つの学園だけではなく、ネットワークを通して皆で勉強するというようなこともあるのではないか。

○木幡研究員：勉強ができる子できない子も出てくるし、学生が入ったりすることもあり、いろいろなサポートが考えられる。個別の状況や関心を考えてできる可能性があるのではないか。

○宝槻研究員：今の学園の枠を越える学びについて、飛行機があつて資源があつてある学園が体験授業化して、それを後学園の枠を越えて、別の学園が活かして体系化したものにアクセスできる。

この発信と私が9月に体験したものを繋げると、自分のやっている授業に20人ぐらい先生が見学にこられた。先生達はみんな舌をまいて帰っていった。同時に先生達は自分で学校でやるのは無理だと思って帰られた。

探究学舎では、実際5人の人間がそれぞれ20時間ずつ、合計100時間くらいかけて授業を作っている。

先生方は、こういった練り込んだ教材があることによって面白いものを子どもたちに与えたいと思う一方で、その準備をしていくのが現実的に難しいと口々に帰っていった。逆に言えば、それぐらいひとつの授業を練りこんで行けばここまで出来るんだということを感じたと思う。

例えば先生達の文化祭みたいなものがあると面白いのではと。A学園で作る授業一本、B学園で作れる一本、それが7本あつてそれぞれを三鷹の子供たちにワークシェアリングをする。そういった発想でやると先生が日々の授業でできないことを非日常的に年間プログラムを作って学園を超えた学びになる。そういったアイデアに落とし込んでいくと良いのではないか。

○木幡研究員：何か共通カリキュラムを作ることというのは、先生の協力を得ることが実は三鷹のコミュニティ・スクールで大切なことと思っていて、従来の学園研究会など、アイデアを出し合つて授業を作るとは生き生きとして、それはいいと思う。一方現実の問題として日々忙しい。勤務時間の問題など現実があつて先生たちが一人で1から0ベースで作ることを考えれば、みんなで色々なアイデアを共有しながらオリジナルの部分を残し、作るとはできると思う。先生達に本気になってもらう。先生達の授業の考え方を変えていきたい。

○宮城研究員：今木幡先生のおっしゃったことに色々制約はあるが、転換点としてはかなりチャンスなのかと思う。この新型コロナへの対応の中で、今までの先生対子供のみで学習を捉えるのではなく、オンラインもあれば対面もあるし、活用できる学習コンテンツもネット上のものを含めたくさんあるということに気づかされた。さらに地域の教育資源もかなり活用できる。それが、まさにこれから先求められるカリキュラムマネジメントだと思う。いろんな教育資源を共有できるようになると、それらをどう組み合わせる学習をマネジメントするか、ティーチャーだけでなくマネージャーとしての力がこれからの教師には求められると思う。

2 意見交換

○後藤座長：三鷹のこれからの教育におけるスクール・コミュニティについて、意見を様々な立場から願います。

○常盤研究員：学校での授業研究開発が学園を越えて共有されることがそれぞれの学園の発展に繋がる。刺激し合えることになるのではないか。昔、広島県教育委員会にいた時、1年に1回、1月の第1土曜日に県内の何千人も先生が集まって、そこでこの1年間での研究開発について、集まってワークショップやポスターセッションのようなことをやっていた。それはとても県内の先生達の刺激になって先生方の意欲を高めることになった。総合的な学習の時間ができたし、また、学園研究もされているのでそういうものをベースに始めていけば、時間がなくて大変かもしれないが、実現可能かなと思う。

○後藤座長：他にいかがか。

○緒方研究員：探究学舎様の感動と驚きが大切であり、それが地域資源の話に進んでいったと思うが。三鷹には私立の高校、大成さんとか法政さんとか ICU さんがあり、実は独自の地域研究をしている。大成さんは理科系が多い。法政は地理歴史があつて今、法政さんがあるところは青梅まで海だった、井の頭公園池、石神井、善福寺はかつて海拔 50 M であつた。今杏林大学さんが買って建てたところは沼地で危なくて何も建たなかった。そしたら事業仕分けをして売ってマンションを建てたが 3.11 の時危なかった。それくらい青梅が河口で狭山湖、多摩湖が三角州である頃は水がだんだん流れてきて埋まってきてずっと池が並んでいる一つだったというところまで研究されている。

今色々な地域資源という言葉があつたが、私立高校や大学が研究して積み重なっているものも是非利用させていただき、資源交流をして行かれたらどうか。一方でジブリさんのようなまさに文化アニメということも、四小さんがやっているが、大沢の方でもやりたいという声もあるのではないか。学園交流をしたらよいと思う。

今度お願いしたいのは7つの学園区の人口推移。東側にクラス、人口増が偏っていると思うが、いわゆる児童生徒の人口増が各7つの学園で変化があるかを教えていただきたい。ベースとしての人口やクラスの変差があると変わってくる可能性があるのではないか。それから コミュニティ・スクールの資源ということがあつたが、防災の観点から、防犯、福祉の点から、コミュニティ・スクール、地域を考えていくことも単なる学校の中だけではない。やはり痴漢が出たり、通学中に暴力行為があつたりしたが、それは商店街の人が地域の方が見てくれていた。家に着くまでの安全を含めてマップだけではなく普段からの行いとしてコミュニティ・スクールの中では拾っていくことも必要ではないか。防災、防犯、福祉的な観点からも取り上げていただきたい。

○宮崎研究員：先日探究学舎の授業をのぞいたが、すごい人気で非常に興味深い授業がされていた。今、日本の社会は、「教育－仕事－引退」という三つのステージの単線型の人生から、これからは多様なマルチステージの生き方が志向される中で、生涯学習で学び続ける姿勢をまずこの時期に作るという意味ではこういう知的欲求を掘り起こす取り組みが公教育で大事なんだと思っていて、これが保護者にも受け入れられて学習塾として成功していることは日本もまだまだ希望が持てると思っている。こういうことを公教育でもしっかり取り組んでいけるようにしたい。

あと木幡先生の話では、三鷹がコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育ということで、学校選択制を取っておらず、地域によって行く小学校もそこからの進学先の中学校も決まっている中では、興味深いカリキュラムや授業が展開されている他の学園の授業も共有できる学園相互乗り入れ授業がオンラインの授業も含めてできれば、学校を選択することができない事の補完ができるのではないかと思う。

このことは、話は飛躍するが、コミュニティ・スクールに関わる大人たちの活動にも言えて、特に三鷹で住民協議会、地域ケアネットワーク、コミュニティ・スクールなどいろいろな住民活動があるがこういったエリアコミュニティに、例えば防災とか子どもの貧困や居場所作りなどテーマコミュニティがうまく絡んで全市的に交流し、協働できるしきみをこれから研究していければと思った。

○木幡研究員：コロナになって変わったのは大きな企業の皆さんの働き方が変わって、意外と会社に行かず出勤は月一回でいいとか、都内のオフィスは閉めて出勤は月一回でよく交通費も出さないというようなどころが増えてきて、在宅に切り替えた、三鷹にはもしかしたら在宅で働いている保護者がたくさんいるのではないか。通勤の時間がなくなったことによって子どものために使える時間が増えている可能性があるのではないか。1時間あれば近くの学校で何かできる、生涯学習で学ぶ、子どもたちのためにも何かできる、両方あるのではないかと思っている。阿原研究員には現実はその甘くはないかと言われるかもしれないが。

○阿原研究員：保護者の中には現在も週に何日かリモートで仕事をしているという人もおり、子どもが家にいる時間はリモートでの仕事はなかなか難しいとも聞く。調査をすればそのような保護者の中には仕事と子どもと過ごす時間を分けて子どもに関わる時間を作れる家庭もあると思う。2016年の頃の木幡先生の資料、コミュニティ・スクール委員の調査を見て思い出したが、コミュニティ・スクールが始まった当初は小学校と中学校が連携するということが目的であったように思う。10年が経過し、今は三鷹の全ての小学校中学校が学園を超えて何かできるのではないかと動いていることがよくわかった。

宝槻先生の話聞いて、こんな素敵なお話ができるのであれば我が家の子どもがもう少し小さければ通わせられたかと思うようなお話であった。

三鷹市はこれから小・中学校に通う全ての子どもたちにタブレット持たせて授業に活かすことを目指していると思う。ただ、授業をオンラインで行うとした場合、長けていない先生がオンラインの授業をしてもとても聞きづらく話も理解しづらいというのが現実だと思う。自粛期間中、大学生・高校生が慣れてない先生のオンライン授業を受けていたが、聞き取ることが難しいと話していた。現職の先生にオンラインでの授業をお願いするのは厳しいと思うので、もしこれからオンラインの授業を行うことを考えるなら、オンラインの授業に長けた先生を三鷹市が採用し、その先生に三鷹市全体で使えるオンラインの授業を作ってもらい、学校に行かれない子どもや不登校の子どもなど、リアルタイムで授業に参加できない子どもたちも勉強が遅れないようにできたら、三鷹の子どもたちは色々な夢が見られ、様々なことに興味を持てるようになるのではないかと感じた。

現職の先生方が子どもたちのために時間をかけて授業を作ってくださっていることはよくわかっている。子どもたちに楽しくわかりやすい授業をと研究している先生方の日々の取り組みを有難く思うとともに、これからの授業のあり方にも期待したい。

○宝槻研究員：三鷹の先生がゼロからやるのは難しいという話があった。さらにオンラインでやるのは絶対無理だと思う。フランスの学校ではオンライン化した時に市民からクレームが来、こんなつまらない授業をするのはやめてくれと言われ、やめたというエピソードがある。

日本もご多分に漏れずいきなりオンライン化にしてもできない。ますますつまらない授業をして子どもたちが興味を失ってしまう。逆に私たちはオンラインに変わって、すでに2年ほど研究を重ねてきている。小学校1年生90分ぐらいパソコンの前で、オンラインでずっと飽きずに座っていられるレベルにきている。研究している10段階のうち6ぐらいの研究が進んでいる。私たちの授業を見学してくれた方が三鷹市のオンラインの授業をするという将来に向かっていく、とすれば具体的に地域のリソースとして貢献できる、こういうことがコミュニティ・スクールの目指している事ではないか。地域のリソースを活かしあって、企業とか家庭とか、親とか公務員とか立場を越えて関係資本を活かしあって課題解決をする。私たちはオンラインというものを持っているので先生達が望めばお分けすることはできる。

○後藤座長：学園を越えてオンラインでは様々な可能性がある。そこには様々な資源を活用するのも大変なことだと思うし、実は私たちの大学でもいろいろなリモートの使い方を専門家に教わっている。ある教育委員会が大学に来てびっくりされた。先生達もお忙しいと思うが色々な使い方を見てみるということは大きいと思う。

○林研究員：オンラインの話が出たが、コミュニティ・スクールがバーチャル・コミュニティ・スクールに繋がっていくといいと思っている。オンラインとのハイブリッドになると思うが、ある学校では、教室で授業をやっているときに隣の教室にZoomで映像を送っている。学校から家庭にZoomで送るとするのが一般的に考えることだと思うが、学校の中で使うというのもいいアイデアではないかと思う。

スウェーデンに住んでいた時に地域のfacebookのグループページがあり、多くのご近所さんが参加していた。回覧板のような機能を果たしていて、どこかの家からペットが逃げたら「この犬見かけませんでしたか？」と写真が流れてきたり、新型コロナウイルスが流行してからは、近所のスーパーが朝8時から9時はリスクの高い人を優先して入れるので近所にお年寄りがいたら8時に来るように言って下さい、とか、かなり頻繁に日常的なやり取りや情報が流れている。バーチャルなコミュニティと言った時にこういう機能が学校にもあるといいのかなと思った。

不登校の子ども達がICTを使って在宅で授業を受けるときの出席と評価のガイドライン作りをやっている。全国の17の自治体と共同で進めているが、子ども達はチャットやZoomを使って遠隔で勉強していてもすごく帰属意識を持つ。たまたま住んでいる学校で、

たまたまその教室が与えられて、たまたまそのクラスや先生とは馬が合わないという時もある。そういった子たちはバーチャルなクラスに帰属意識を持っているが、実際の教室に通わないと出席も成績もつけられないと言う場合があり、全国の子供と先生が悩んでいる。

コミュニティ・スクールが一つの学園というところからハイブリッドにつながっていけばいいのかなと思うことと、その時に大学で使っているようなLMS (Learning Management System)や、SNSのようなコミュニケーションツールがないと運用が難しい。Facebook や一般のSNSだと13歳以上しか登録できないので、なかなか使い勝手が悪い。

またネットセキュリティやマナーも必要だと思うが、そういうのをやった上で、いつでも繋がれる、そういうツールが必要なのではないかと思う。なので教室の授業をいかにネットで置き換えるかというのではなく、ネットを含めたコミュニティの中で地域の子どもたちを健全に育てていく場を保障する、広い意味での学習権の保障と考える必要がある。

○柴田研究員：宝槻先生の探究科学者の授業の一部を拝見させていただき、私も受けてみたかったと思った。こういった専門的に興味開発している所の授業の手法を学校教育に導入するにはどうすれば良いかということを考えながら聞かせていただいた。学校教育は教科書をベースに進めていくところで、その教科書をもとにそれをどういう風に教科横断的であったり、深い学びにつなげていけるかということと、どの教員がやっても同じように子ども達に教育を行き渡らせなければならぬという使命もあるのかと。

現在の先生方もかなり多忙化していて学生から見ると教師の仕事はブラックなんじゃないかというお声も最近よく聞かれる。今年の夏に三鷹市で2年次3年次の先生達を対象にした保護者対応の問題解決の講座をさせていただいたが、そういう場であったり、他市の教育委員もさせて頂いていて、研修させていただいているが、若い先生方が保護者との対応で苦しんでいたり、特定の児童や生徒の関係で苦しんでいて、なかなか教材開発や授業研究というところに力を注ぐのが難しい、自分の精神状態を保つだけでも大変だという先生も一部だけいるというのが現実である。学校運営協議会に参加させていただくと学校に協力的な保護者や地域の方が多いが、実はそうでない保護者の方もやはりいて、そういう方たちの対応に先生方が苦しんでいる。そういうような現状も加味しながら、いかにどんな教員がやっても同じように子どもの関心を引き出すことができるコンテンツづくりが重要なので、そういうところでソーシャルキャピタルというところで地域の中の豊かな様々な資源を活用できるネットワークの構築がこれから求められるのではないか。

木幡先生の自律分散協調システム、個人の自律というテーマが日本で求められてくるのだなということを知った。自律した個人が地域を作っていくスクール・コミュニティ、次世代を担う子どものためならどんなことでも協力できる、地域の共通のテーマとして地域の目標として掲げやすいことだと思う。保護者ではなくても地域の子どものために学校に協力する方を、どのようにして学校と結びつけるかが課題だと思う。

最近コロナ禍の中であるので、オンライン環境を市全体に整えていく中で、学校を他の防災関連の機関とネットワーク化していく、これからの災害や感染症も地域ぐるみで考えていくということも必要ではないか。

家庭との連携というところもオンラインなどをこれから活用すると、忙しい家庭で地域活動に本当は参加したいけれど参加できないという親御さんも参加しやすい環境に整備されていく。こういった家庭との連携、学校教育の中だけでは難しい部分を家庭といかに分担しながら、家庭でさらに子どもの興味関心を深められるような取り組みができるかというところも子どもの個性を伸ばしていく上ではとても重要になってくるので、社会教育の中で家庭教育学級が学校で行われているが、その現代版のようなものを三鷹市で作ってあげれば面白いのではないかと思う。

○後藤座長：まさに家庭と地域と一体となった教育、地域と共に生きるまちづくりと発展性がある。

○佐藤研究員：私は障害者施設を運営しているのですが、コミュニティの中に施設をぜひ活用いただきたい。取り組みを紹介したい。施設のところに中学校があり、活動を一緒にすることがあって、地域全体で小学校や中学校でみんな防災訓練を行ったり、夏祭りを中学校の校庭を借りてやっている。あと施設で手話教室も取り組んでいる。

施設も子ども達が多様性を学ぶ場として、施設にはいろんな資源があるので、高齢者の施設、障害者の施設もコミュニティの中で活用いただけたら良いと思う。

○後藤座長：ご存知の通り、教員免許を取得するためには学生たちが施設の体験に行かなくてはならない。とても良い取り組みである。

○宝槻研究員：今日シェアしたことは、例えば、子どもたちの興味が湧くような授業を作れたらいいよね、さらにはその授業が地域資源と組み合わせさせた形で展開されるといいよね、その授業を学年をこえて参加できるといいよね、さらにはオンラインでできると災害にも強くなっていいよね、というアイデアが出た。佐藤研究員からは私たちの施設もリソースとして活用していただきたい、とコンセプトとご自身の提案と重なっていると思う。すべて、議論の中心は先生がその取り組みをするのかしないのか、できるかできないのか。やるのは先生たちである。現実問題先生たちは忙しく難しいという話もあって、いい知恵やすばらしいビジョンがあってもプレイヤーのタスクフォースがなく、意味なく理想論ばかりあって、いいアイデアでたね、で終わりとなってしまう。一度に、先生に研究所から、または教育長から提案するという事は難しいと思う。伺いたいのは、例えば、プロジェクトチームを作って、三鷹市内に200人の先生がいたとすれば、学園関係なく、10人の有志をピックアップして、地域資源と掛け算した授業を作ってみる、オンライン化に取り組んでみる、スモールスケールサクセスを狙って具体的なアクションをプロジェクトチームでできるものか。

○宮城研究員：教員にも驚きと感動は必要であってこういう学習支援、授業ができるんだということを具体的に見ることができる、感じることはとても大事である。プロジェクトチームで教員が自分の得意な分野を活かしながら様々なコンテンツを使って

何か具体的に子どもたちの興味を開発するような授業を実際につくるところからスタートするのは学校にとっても得難い機会にするのではないか。

○宝槻研究員：実際にできるか？

○宮城研究員：できるかはわからないが、ありだと思ふ。その仕組みをこの研究会で提言できれば面白い。

○松永総合教育政策担当部長：今お話があったようなことは教育委員会が招集するという形で各学園から、この人 ICT のスキルで授業作りが上手だ等、今 GIGA スクール構想の中でどういう授業づくりをしていくのということで、指導課では集めて研究開発している。

そういうことからすると全く同じ仕組みで、今本当に子ども達にとって今大事な授業ができるのかなと考えていくのは十分できると思ふ。

○相馬研究員：やろうと思ったら研究指定でいくつかの学校でやっていけばと思ふ。一番よいのは探究学舎さんに任せることだ。その予算を組んでいけばよいと思ふ。そういうことをやっていかないとなかなか変わることはできない。時間ばかりかかって1年経っても探究学舎さんのいう10段階のうち1段階2段階で終わってしまう。それならば思い切ったところでやって行く。

例えば関東の方で研究会といえば義務教育課程だと公立学校しか来ない。ところが関西では私立の先生も積極的に呼んでくる。そういうところでは垣根などを取っ払ってもよいと思ふ。優れた実践をしている私立学校とも積極的に連携していく。そこをやっていかないと一番の問題意識は変わらないと思ふ。

○後藤座長：それはかなり刺激的な取り組みで、かなり成果が期待できる。運動関係でも専門家に指導してもらっている。まさにそのような時代である。

○宝槻研究員：最後に、具体的なアクションに落とし込んでいくことには興味はあるし、それができないと、この研究会に定期的にコミットする意味が正直ない。私ができることが何かと言うと良い授業を作りたいという選抜された10人に具体的なノウハウを提供し、その10人にさせる具体的なことは提案できる。今後も4回5回と討論会の中で参加できればいいと思ふ。

○後藤座長：いずれにしても具体的にどう動いていくかということを考えていきたい。

3 事務連絡

○総合教育政策担当部長：今回は、11月11日（水）17時から19時。場所は三鷹ネットワーク大学。ここまで3回の研究会で、三鷹のこれからの教育を考えるにあたって、いろいろなテーマでお話を頂きながら議論を交わして来た所である。この研究会は2年ものと考えているが、一年が終わるにあたって中間のまとめをしたいと思っている。今回は今までのところの論点整理をしていきたい。それをどうやって具体化していくかというあたりの議論をする場所として、2時間まるまる自由に語っていただくように考えている。

5回目は11月下旬から12月上旬で考えている。5回目において、中間報告の骨子についての先生方の意見を頂きたい。今年度は個別最適化された学び、スクール・コミュニティについてという、これからの三鷹の教育の方向性を考えるにあたって、全体的な方向性を中間報告でおまとめいただきたいと考えている。

○宮崎研究員：中間報告のまとめにあたり、議論する中で、本日初めてスクール・コミュニティが出てきて、それは学校教育の枠だけでは止まらない広い話で、コミュニティ・スクールならまだしもスクール・コミュニティとなると、「人づくり」とか「まちづくり」とか生涯学習の話になり学校教育だけの切り口で考えると非常に難しい。その辺りの考え方を次回議論していきたい。

○後藤座長：これで本日の研究会を終了する。